探求・川にちなんだ万葉集の歌

第三十九回

万葉の川心

横浜市立綱島小学校教諭　澤井　園子

旋頭歌（巻第七　一二九三番歌）

霰降り遠江の吾跡川楊
刈りぬともまたも生ふといふ吾跡川楊

この歌に会って、自転車で通学していた高校時代を思い出した。暖簾のようにさがった街路樹の柳を、手でどけながら走っていた。こんなに伸びてどうするのかと思うのもつかの間、ある日ばっさり枝が落とされた。寒空にここまで切らなくてもと案じたが、意味がなかった。次の夏には同じように暖簾になったのだ。刈っても刈っても見事なまでに生えてくる。

保育園で出会った「いじめっ子」。小学校でも、中学校へ行っても「気の合わない」意地悪な誰かがいた。それは大人になっても同じだった。家に増えていく電化製品たち。もう買うこともないだろうと思うそばから故障して、最新鋭に買い換えていくことになる。ひとつ心配事がでてきて、片付くとまた別の悩みがやってくる。「それが人生じゃないのかしらね。」と母が言う。母はいくつ苦しみを乗り越えてきたのだろう。苦しみに出遭うとき、それは必ずその人に見合ったもの、解決できるというが、時々立ち直れなくなる。安易な方へと流されそうになる。まして、出口の見えないトンネルに入ったときはなおさらだ。柳の生命力に圧倒されて、自分の小ささが身にしみる。今は「癒される」ことよりも、もう一度思い出したい。自分の中の生命力を。体の中に息づく六十兆の細胞のすべてが、こうしている今「生きよう」としていることを。

ヤナギは枝葉の垂れるものに柳、立つ方に楊の字をあてる。楊の成長は、サシ楊などといわれ、挿し木をして根付くことと恋が実ることをかけて詠まれた歌がある。万葉集のこの歌は旋頭歌なので、何かの作業時の歌と思われる。霰降り遠江の吾跡川べりの楊よ。いくら刈ってしまってもまた伸びてくるという吾跡川の楊よ。振り捨てても、消し去ってもあの人への想いがあふれて止まない。それが恋よというように。「霰降り」は、霰の降る音「トホトホ」から枕詞になって「遠つ」にかかる。ヤナギは今に至るまでに、柳顔【細長い顔】に柳髪【長く美しい髪】、柳腰【細くてしなやかな腰つき】と言葉も生まれた。李白の詩には柳を折って別れる人に贈るとある。枝がしなやかに返るように「帰る」とかけているのだそうだ。柳に風と受け流し、雪折れもない。そんなふうに生きられるだろうか。もう少し歳を重ねたら。この冬を乗り切れば。修行を積めば、それとも瞑想すればいいのだろうか。憧れるばかりでなかなかヤナギになれそうもない。吾跡川の所在は不明だが、静岡県引佐郡細江町の気賀に歌碑が建っている。近くには澪つくしの碑もあり、万葉に縁の深い土地だ。

ある本に「どんなふうに死にたいかを考えることは今をどう生きるかを考えることだ」とあった。追われる人生じゃなく、迎え撃つ人生にしたい。自分はちっぽけだけれど、どんなふうに生きるのか自分で決めることができる。そう、柳に川に、励まされながら。

静岡県引佐郡細江町